

小説の方法

伊藤 整

校訂・註 曾根博義



筑摩叢書 338

筑摩叢書 338

小説の方法

伊藤 整



筑摩書房

伊藤 整 (いとう せい)

1905年～1969年 作家・評論家。

著書 『小説の認識』『芸術は何のためにあるか』『日本文壇史』『鳴海
仙吉』『火の鳥』『汜濫』『変容』他多数。

小説の方法

筑摩叢書 338

1989年11月25日 初版第1刷発行

著 者 伊 藤 整

発 行 者 関 根 栄 郷

発 行 所 株式 筑 摩 書 房
会 社

東京都台東区蔵前2-6-4

電 話 東京 5687-2680 (営 業)

東京 5687-2670 (編 集)

Printed in Japan

©1989 S. ITO

振 替 東 京 6-4123

郵 便 番 号 111-91

ISBN4-480-01338-5 C0095

三松堂印刷・永興舎

乱丁・落丁本の場合は、ご面倒ですが、小社読者宛宛に
ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

一	小説への疑問（序論として）	
二	理論と実作との距離	19
三	内なる声と仮装	30
四	環境と創作	43
五	日本の場合	57
六	放棄と調和	67
七	自我の作用	77
八	物語りの発想	96
九	散文芸術の性格	114
一〇	スタイルの発生	140
一一	西洋の方法	151
一二	日本の方法	171

一三 附随的な推定群

194

初版あとがき

212

三版あとがき

213

市民文庫版序文

217

河出書房版全集第十三卷序文追記

222

新潮文庫版あとがき

222

付録

逃亡奴隸と仮面紳士

226

註／曾根博義

236

解説／曾根博義

260

人名・作品名索引

278

小説の方法

一 小説への疑問（序論として）

第二次世界戦後一年目の頃、私は日本の私小説と作者の身の上話との混雑のことを、ある新聞の文芸時評⁽¹⁾に書いた。その後二度ほど出席した座談会⁽²⁾で、その問題が再提出され、結局その度に結論のない論議のきっかけとなった。そしてそれ等の座談会で逢った人には、たとえば舟橋聖一、林房雄、丹羽文雄、木々高太郎、江戸川乱歩というような、多かれ少なかれ、所謂私小説反対論者があつた。そして、その論及された文芸時評で、私小説の弱点を取り立てて論じた私が、言わば私小説弁護者の立場に立たされるといふ形になつたのである。

第一議論を立てる場合に困るのは、論難される場合の私小説と、弁護され、または主張される場合の私小説はちがつているようであるし、私小説そのものが、今の日本の文壇では、たとえば、川端康成、堀辰雄型、それから、尾崎一雄、石塚友二、上林暁型、それから、北原武夫、太宰治、高見順型まで、また宮本百合子、徳永直、中野重治型までの間に大変隔りがあるし、また現在かなり大きく変化しつつある、ということに触れずに漠然と取り上げているという大ざっぱさが、特に考えられねばならないだろう。

これを論議する側においても、「私小説は本格の小説と違う」という立場で論難する林房雄、丹羽文雄、舟橋聖一的態度が一群あり、またある種の私小説の中の「封建的あるいは資本主義社会の個人意識的執着の悪い独善さ」を有害であると見る岩上順一、小田切秀雄的な批評態度が漠然と区別される一群をなしている。

以上の区分は、かなり粗雑なものであるが、こういう風な略図の設定にしても、岩上順一が試みた⁽³⁾以外には、特にはっきりと為されたこともないようである。また文学作品の中から、今の小説にある西欧の写実主義的要素と自我意識究明の要素、それから体質的にまた伝統的に我々日本人の持っている随筆文学の系統、それから純粹な論理となり得ないで形象を借りてはじめて表現される日本流の思想発表の方法、また現実逃避と諦観の文人的脱俗生活の好みなどを取り上げて見ることも面白いであろう。

しかし、私は現在の日本の小説を論ずるのに「私小説と本格小説⁽⁴⁾」というような形式で論ずることは、大して意味あることではない、と思っている。それはほとんど、かえて日本⁽⁵⁾のジャーナリズムが作家に課する作品発表方法として論ずる方がはつきりする。そして新聞の発行部数と大衆雑誌の発行部数、それから評論雑誌や文芸専門雑誌の発行部数と読者の質の問題として取り上げた方がはつきりするのである。しかしそういう根源をつつかずに、作品の中に作者の身の上話が多いという結果のみを取り上げるのは、日本的な習慣であるから、それに特に反抗しない限り、私小説という言葉から現代小説論をうち立てるといふ便宜もあるのである。ただこの「私小説」といふ言葉の意味の混雑をうまく避けることが出来さえすればであるが。

私が前記の時評で、私小説の積極面として取り上げたのは、その中の思想表白の手段としての私小説の形式のことであった。繰りかえしになるけれども、一部分を引用するならば、

「たとえば正宗白鳥の『交友録』⁽⁵⁾を読むとする。するとその作品の中の岩本というのが岩野泡鳴であり、K博士が河上肇であるということをすぐ推定し、そういう人物の性格と経歴を知り、かつ白鳥その人の思想傾向や経歴を知っている人でなければ、到底この作品を味うことはできない。（中略）そういう支えや準備は読者の方で負担しなければならないのである。これが小説であろうか。これ等の作品は文学史的感想と呼ばれるのが至当ではあるまいか。（中略）そこには自惚れと気楽さと無責任と共に、尊敬すべき謙遜、遠慮という徳性さえ発揮されている。驚くべきことである。日本の現代小説を無邪気な読者に理解させるために、某々氏は実に多忙な流行作家であって、執筆多忙のため作中人物は名前のみあつて描写の何もないことがあるけれども、特に説明なき限り、作中の主人公は作者自らなりと了解されたし、という断り書きを、編輯者が見出しの下に書き忘れているのは実に残念なことだ。（中略）しかし念のために言っておくが、こういう遠近法の完全な欠如のために日本の現代小説が悉く下らないかという、そうでもないから困るのだ。白鳥の『交友録』の思想などは、まことに面白いのだ。日本の小説家に思想がないとはよく言われて来た言葉だが、私の考はむしろ反対である。（ある種の）日本の小説には思想しかない、と言った方がはるかに適切である。」

つまり正宗白鳥の作品などは、日本文学の系列としては「方丈記」や「徒然草」などの系列におけば、うまく坐るのではないかと私は思うのである。そして、それで大変結構であるし、現代日本人にとって名譽なことでもある。私が上記の引用文で省略した、一般的気易さを非難したような苛々し

た言い方で、この種の作風をさまで論じ難ずることはないのである。また批評家はおおむね、思想を主として取り上げ、その思想の肉づけの経過という芸術の実質を見のがすから、批評家が白鳥の思想の確かさを買い、その肉づけの貧弱さを見のがすことが、より高級な態度であるという態度を取ることに目くらまされてはならない。

作家というものはその時代のその芸術の鑑賞される方向に傾き、かつ批評家の暗示にかかりやすいものである。日本の現在の小説が身の上告白に急で、作品の肉づけに貧弱であるという傾向は、批評家の罪でもある。ほとんど常に、批評家は、作家の身の上告白の真実さと思想のみを厳しく検査するから、作家の方でも、いつの間にか、その二つの点でのみ正確で潔癖であらうとする。また一面では、現代日本の小説の身の上話の貧困さは、社会の作家蔑視の影響である。日本の小説読者は作家に絶えず真実をのみ求めながら、なぜ家の子供はよその子供のように快活でもなく、調和性もなく、肥って元気にならないのかと疑う母親に似ている。そして瘠せ細って、眼ばかり光らせた、いじめられた子供は死んでしまう。または利口にも、考えぬふりをして、最小限の行動によってのみ答えようとする擬態が採用される。所謂身の上話作家の素朴単純な構えは、おおむねこの究明逃避の擬態である。

そして、そういう環境の諸条件の結果、遊ぶ道具は貧弱であり、遊ぶ場所は狭く苦しいのである。考える力のある子供であっても、絶えず究明し訊問し鞭うとうとするヒステリックな母親に満足を与えることは到底できない。そこで現象として川崎長太郎から永井荷風にいたる作家の痴と愚の擬態が立ち並んでいるのだ。ただ強力な思想を本当に把握している白鳥のような大人のみが、もう遊ぶ無邪気さは失っているが、その裸の思想を述べることによって、徒らに神経質な批評家を圧倒することが

出来るのみである。そうすると、白鳥や小林秀雄や中野重治が扱われているのを見れば分るように、批評家は実に思想にのみ鋭敏に反応し、他の芸術成立の要素については一言も為すところなく放棄してしまうのである。思想がむき出しで事実のみ書いて、美的作爲がなければいほどそれは珍重されるような形になる。

私小説の変態性は、たしかに一面では日本の文芸享受の仕方の特異性によって、生れたとは言わぬまでも強められた。それほど文芸批評は日本ではきびしいのである。作品よりも、文壇というギルドの中での生活態度が批評され、作家は絶えずギルドの中での生き方に注意すると共に、その生き方の告白と弁護を作品の内容とせざるを得ないのである。そしてこのたがいに知り合っているギルド生活の実体が文学作品の実体となつてゐるために、作品は常に、身辺雑記であり、身の上話であり、人物の説明抜きが必要な礼儀となつてゐる。そしてそういう文壇事情を知らない第三者には文壇の小説が不可解であり、興味が無いのである。

そしてこういう風に文壇生活そのものが倫理的思想的修練であり文壇は道場であるため、作品は告白文以上の肉づけを不要とする結果、肉づけの作家谷崎潤一郎は東京に住む事ができなかった。永井荷風は文壇人と交際するに耐えなかった。生活の論理の思考者志賀直哉は文壇の精神的背骨とならねばならなかった。悉く必然である。

そして社会思想もまた思想として独立せず、この文壇的倫理修練の延長である。すなわち、作品の中で問題にされるのは、私小説批評と同様作家のギルド内における道德的要素である。社会的思想による新しい文芸評論もまたギルド内における倫理的修練の延長である性格を持つてゐることに於いて、

大変日本文壇的であるように私には思われる。それ故そこでも新しい私小説が要求される必然性がある。そして告白文の連続であり、第三者には理解されぬながらも、日本の現代文学の倫理修練の骨格と筋肉は極めて強靱であり、かつ潔癖であり、正確ですらあるので、外国作家がよしんば日本に来て住み作品を発表しても、よく耐える所ではあるまいと私は思う。

こういう文学者が私生活の覗き合いをするということは、勿論日本のみの事ではないであろう。しかし、これは、日本の風土的な文化的な問題でもある。和辻哲郎に言わせたならば、気候風土が日本の和歌や俳句における作家の生活覗きごっこを生んだように、私小説における性格の覗きごっこを生んだと決定するにちがいないのである。モンスーンによる農業、湿気に耐えるための開放性住宅、開放性衣服、その結果の特殊な農業の大家族制のための個我の不成立。日本にキリスト教がないから本格小説が育たないなどというのは、反対で、日本にはきつとキリスト教はうまく育たない筈である。しかし和辻哲学風にでなく、マルクス主義的思考の型から言っても、今批評家たちがしているように、私小説における封建性を捜すことよりも、日本の経済的社會制度の推移の道程から生れざるを得なかった個人の不確立に始まる文壇ギルドの特殊性と、それによって特色づけられた日本の小説と批評、特に左翼的批評の特殊形態という系統の考察は十分為し得るし、為すべき価値も必要もある。私は近藤忠義とか小田切秀雄などの基礎的な研究は読んでいないが、そういう研究はすでに存在しているのかも知れない。ただ現在の文学についての明白な秩序づけを私はほとんど知らないのである。

しかしこの日本文壇のギルド的特色から来る思想性や対批評性のみをもって、小説の自伝的傾向という世界性のある文学の問題は解決することが出来ない。次に神西清の私小説についての注目すべき

考察を紹介して見よう。これは雑誌『文藝』の一九四六年六・七月号に出ていた「読書日記抄」⁽⁹⁾の中の文章で、前に引用した私が新聞に書いた文芸時評の直後に読んで印象の強かったものであるが、神西清が書いたのは、その一、二カ月前であつたろう。私はこれを読んでから、前記の時評を書いたらもつとよかつたと思つたのである。

「今日わが国の詩の不振を人はよく言うが、それは半ばは当り、半ばは當っていない。いわゆる心境小説なるわが国独特のジャンルが、立派に詩の代用をつとめて、読者の詩的渴望をみたすとともに、本来の詩の役割を奪っているからである。事実、心境小説の或るものは、殆ど純粹な散文詩にまで磨きあげられている。それは殆ど乃至は完全に、小説としての機能を喪失しさえもしている。そう考えてみると、不振もしくは空白なのは、詩ではなくて却つて小説なのである。」

〔中略〕シャルドンヌは、『隣人愛』の第五章で、珍しく小説論をやっている。（中略）一種の私小説論の極致とも言えるであろうが、それよりも寧ろ良識の行きわたった人間論の一つの存り方として面白いから、そのあらましを記して置くことにする。

「シャルドンヌは小説を二つに分ける。一つは、『荒唐無稽な、拙劣な、絵そらごとばかり書いてある説話』で、この奇妙なジャンルの作者は、大向うの註文に應じて製作する。もう一つは、『ラファイエット夫人このかた或る種の作家がこの夫人の先蹤に力を得て語つて来た一種の物語』であつて、それは『自分というものに近々と触れているもの、敢えて小説とは銘うたれていなかったもの』なのである。この二つをならべくらべて、彼はつぎのような断案をくだす。『今日、世人の記憶にとどまつているのは、この種の物語だけである。愛好家^{ファンナチュア}たちは知らず識らず、ジャンルというものの真の原

理を發見したのだ。湮滅せずに残った数すくない小説のうちに、われわれの愛するものは、一人の人間のすがたなのである。」

更に神西清はそれに続いて、シャルドンヌが以上の推論を明確にするために引用したというマルセル・アルランの言葉を紹介している。それは「……作者がその作品を、自分の生活の一部を以て作つたのでないなら、自分の情熱を語っているのでないなら、あつさり筆を折るがよい。わたしが見たいと思うのは、一冊の本が、一つのアヴァンチュールの説話が、それ自身、その作者にとっても最も大切なアヴァンチュールであることを感じさせるような、そのような^{アヴァンチュール}気合である。真の作品は、人間に關したもので、個人に關したものでない。それは人間の個人的な表白なのだ」というのである。そして神西清は、これで通俗小説なるものとの絶縁は成つたのであるが、次には心境小説的なものと（私小説なる真の小説とを）區別するためにシャルドンヌがトルストイを次のように評していると紹介する。

「彼（トルストイ）の作品をとおして、人は彼の生活や彼の思想上の出来事を、跡づけることができる。しかも彼は、ほかの誰にもまして、めいめいの個性と言葉とを具えた様々の人物を、創りだす能力があつた。自分の作品の中に没入することが深ければ深いほど、そして、自分の財産を残らずそこに賭ければ賭けるほど、作者は自分と違つた、めいめい勝手な生活を営んでいる人々に、出会うものである。（中略）真に己れ自身たることは、即ち他人を發見することにはかならない。」

さて引用はこれで終つたが、神西清もまたシャルドンヌの考察をきつかけとして、小説作家の告白性という現代文学の世界的な偏向を扱つて見ているのである。ついでながら、神西清が、大変感動し

ているのは、それ等のフランス作家たちの現実の作品の裏づけを十分に知っていることから来ているのであろう。そして私も、力あるこれ等の作家たちがその創作体験からこれ等の言葉を吐いたということは、大変注目すべき、かつ興味のあることだと思う。小説にとって、作者の私がどうあるかという問題は、私小説が日本だけの問題だと日本の文壇人が思っているのちがって、ほとんど現代の世界の文学、いな、文学そのものの根本の問題である。そして、もし「小説」という設題をして、この根本の問題を論じないのであれば、その時は、人は「短篇小説の日本的偏向」という問題を論じているのであり、それはその現象を通して、前述したように、発表機関の問題や、日本文壇ギルドの成り立ちの社会性やその内部での倫理修練と生活観き合いのいかめしい苦行的習慣を論じていることなのである。だから前に書いたように「本格小説と私小説」というような問題の設けかたはほとんど無意味だと私には考えられる。

この日本文壇の修練ぶりが決していい加減な間に合わせのものでない証拠には、もし、ここに神西清が引用したシャルドンヌやマルセル・アルランの言葉を、彼等の創作実践の背景なしに、単なる理論として誰かが日本文壇で言ったとすれば、それはほとんど相手にされぬような幼稚な素朴な思考だと思われるにちがいないほどである。私自身が今現にそう思われるであらうように。では彼は何を生活し、何を書き、何を思想し、そして今そのようなことを言い得るのか、ということに必ずなってくるのである。

さてシャルドンヌが言っているように、私たち文学に関係する者は「幼年時代」にトルストイ自身を見ると同じように、いなそれよりもっと十分にウロンスキイやステパン・オブロンスキイやアン